

「外来語と異文化理解」

広島大学外国人教師 李 国棟

アメリカの清涼飲料水 Coca Cola は、日本語では「コカコーラ」と訳され、中国語では「可口可樂」と訳される。発音の面から見れば、両訳名はいずれも Coca Cola によく似ているが、ただその間に大きな違いがある。つまり、中国語の訳名は発音が似ているだけではなく、それなりの意味もある。よく見ると、それは「口にす可し、楽しむ可し」と訓読できるのではないだろうか。

中国人は外国の物を受け入れる時、よくこのような訳名をつけるが、日本人はなぜそうしないのか？ 外来文化に対する両国国民の違った態度に、根本的な原因があると思われる。

中国人は数千年来ずっと君臨的な中華思想を持っているので、外来文化にずっと蔑視や排斥の態度を取りつづけてきた。1840年代以降、中国は西洋列強に負けてしまい、自己反省はしたが、中華思想を捨てるわけにはいかなかった。「中体西用説」を打ち出し、技術など非根本的な「用」の面で失敗を認めただけで、価値観や表出様式など根本的な「体」の

面で失敗を認めなかった。「可口可樂」という訳名には、外来文化に対する中国人の中体西用的な抵抗がつくづく感じられる。中国人はただ「用」の面から Coca Cola を受け入れているだけで、「体」の面ではそれを断固として拒否してしまっただけなのである。中国近代化過程の多難さは、つまりそれに対する中華思想の抵抗に由来しているのである。

しかし、日本人は違う。中華的な朱子学に支配された江戸時代を除いて、昔からずっと進んで外来文化を受け入れてきている。「コカコーラ」という訳名には、「可口可樂」のような抵抗がまったく感じられない。日本人は「用」と「体」の両面から Coca Cola を受け入れているのである。日本の近代化も「コカコーラ」のように成功したのである。

広島市には、中国杭州をはじめ、各地の美しい景色を積極的に取り入れて縮めた縮景園がある。もし中国文化の本質が「中華」だとすれば、日本文化の本質は「縮景」だといっても差し支えあるまい。

国際理解教育の推進

— アジアと日本の近現代史に学ぶ —

広島市教育センター指導主事 沖 増 正 和

近年、「宇宙船地球号」という言葉が示すように、世界各国は政治・経済・文化・スポーツなどあらゆる分野において、相互に深いつながりをもつとともに、相互の協力関係を深めています。このような国際情勢の中にあつて、今回の学習指導要領改訂の基本方針の一つとして「我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養う」ことがあげられ、国際化社会に主体的に対応できる子どもの育成が求められています。

さて、国際理解教育は、図のように人権尊重を基盤として、自国理解、他国理解を深めることにより、相互理解を深め、国際協調の精神を培うことをねらいとしています。

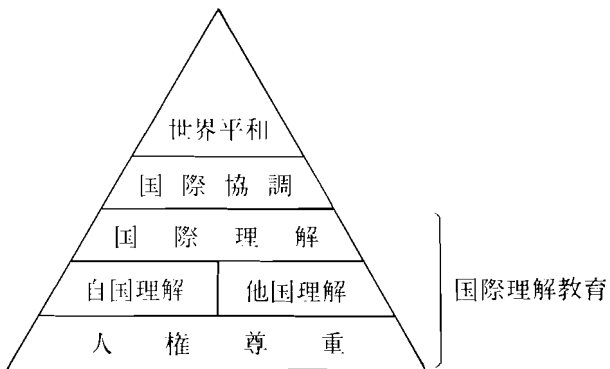


図 国際理解と国際理解教育

現在、各学校では各教科・領域を通し、児童・生徒が諸外国の文化や歴史等を正しく理解するよう努めています。また、公民館等で

も国際理解やアジア理解の講座がもたれ、市民の国際理解に大きな役割を果たしています。

一方、平成6年に広島市を中心に開催される第12回アジア競技大会に向け、アジア諸国・地域の文化や歴史等に対する広島市民の関心も高まるとともに、アジアの人々との交流も盛んになっています。

このような中でアジア理解を深めるには、アジア諸国・地域の文化等を正しく理解するだけでなく、日本との歴史的なつながりを現代世界の形成の歴史的過程、特に近現代史を中心にして理解することが大切です。また歴史的なつながりを正しく知るためには、日本からみたアジア諸国・地域の歴史だけでなく、アジア諸国・地域からみた日本の歴史を知るとともに、アジア諸国・地域の歴史における日本の位置を正しく知ることが必要です。

広島市教育センターでは、主として東アジア・東南アジア諸国・地域の初等教育、中等教育の歴史の教科書に関する調査・研究を行っています。今後、調査・研究の成果は学校教育及び社会教育におけるアジア理解教育の資料の一環として活用できるようまとめる予定にしています。

21世紀へ向け、今後も世界各国から多くの人々が日本を訪れるとともに、多くの日本人が世界各国を訪れることでしょう。「宇宙船地球号」の中の異なった文化や歴史をもつ人々との相互理解を深め、国際協調のもとに、世界の平和に貢献できる人間の育成が必要です。

「T I E Wに参加して」

広島市立安佐北高等学校教諭 堂 鼻 康 晴

21世紀は世界共同社会であり、英語を国際補助語として世界と対話する時代だと言われる。世界市民意識を持ってこの地球社会で活躍する生徒を育成するために、英語教育の担う役割は極めて大きい。新学習指導要領に示されている「積極的にコミュニケーションを凶ろうとする態度」は、実は我々英語教育関係者に求められている資質でもある。広島市教育センター主催の「Total Immersion English Workshop (英語宿泊演習講座)」は、まさにこうした時代の要請に応えた研修講座といえよう。この講座は毎年8月下旬に、2泊3日の日程で、広島市青少年野外活動センターで開講される。「total immersion」とは、母国語を完全に排除し、目標言語のみを使用した授業形態を意味する専門用語だが、まさに本講座は英語漬けの3日間である。プログラムは、主に英語指導助手(AET)によって運営され、ゲームの紹介、効果的なteam-teachingについての討論、講演、日本文化の紹介、夜のプログラム等々多彩である。私はAETと寝食を共にし、議論をする中で、考え方や生活習慣の違いに幾度か困惑したが、同時にコミュニケーションを深めることによって、人間同土、共通の価値観も併せもっていることを認識できたことは大きな成果であった。

21世紀を目前に控え、ますます「国際化」気運の高まる今日、改めて「国際化とは何か」、「国際理解とは何か」を自問する時、「異」文化理解ではなく、「同」文化理解—独自の文化を尊重しながらも、同じ人間として共通部分に目を向けること—へ発想を転じ、コミュニケーション能力の育成に努めていくことが大切であると考えている。

「国際理解教育講座を受講して」

広島市立基町小学校教諭 原 田 順 子

この度、広島大学の李先生より「日本人の考え方と中国人の考え方」について経験談やユーモアを交えての具体的な話を聞くことができた。中でも中国での「美」の概念には、「食べること、味わうこと」や「大であること」が根本にあるという話は興味深かった。このように民族や風土による考え方や感じ方の違いを知るということは国際理解の第一歩であろう。

本校は、平成元年度から文部省の中国帰国子女教育研究協力校となり、年度途中から「日本語学級」を設置した。現在は32名の中国帰国・入国児童が学習に取り組んでいる。私たちは、言語・習慣の違う子どもたちの具体的な姿を通して異文化を理解していこうとしている。これまでの取組の中で、子どもたちをアジアの国々の民謡に親しませたり、インドのスポーツや韓国の遊びに触れさせたりして、異文化理解を進め、よりよい指導の在り方を模索してきた。平成4年2月には「中国帰国児童教育研究発表会」として、その一端を公開し、他県の先生方とも意見交流した。

私は、文化や習慣の違いを踏まえた指導や、帰国・入国児童とそれらを取り巻く児童の相互啓発がいかに大切であるかを日頃から痛感しているが、この度の受講で、異なる文化や違った価値観を先ず知ること、そして文化や価値観の違いを受容できる柔軟な態度を養うことが国際理解教育に通じるという感を一層強くした。

— 教育相談室から —

Q

おこたえします

A

— グループで非行を繰り返すA男 —

Q 中学2年生のA男は、授業を抜けて他のクラスの数人とグループで行動することがあります。校内で喫煙、器物破損などの行為があるので、A男や保護者に対して、厳しい指導を繰り返してきましたが、一向にA男の態度が改まる兆しがありません。今後、どのようにかかわっていったらよいでしょうか。

A このようにグループで非行を繰り返す子どもたちは、学習に自信がなかったり、級友や教師との人間関係がうまくいってなかったり、親子関係において何らかの問題をもっていたりするなど、それぞれ共通の条件や素地を持っていることが考えられます。このような中で欲求不満がつり、さまざまな問題行動を示していると思われる。

A男も自分を受け入れてくれ、存在感や所属感を味わえるグループの中で、このような行動を示しているものと思われる。

1 個別面接を実施する

面接場面において、教師が生徒の表面的な行為だけをとらえた注意や叱責に終始すると欲求不満や教師への反感を増すだけで、それ以後の指導を困難にする場合があります。

面接では、A男の不満や悩みなどを十分に聴くという姿勢で、A男と人間関係をつくることに留意します。「そうでもしなければならぬ気持ち」をしっかりと受けとめる中で信頼関係がつけられてきます。そして、自然と生徒に自己反省が生まれ、そこから改善策を話

し合うことができたり、励ますことができたりします。

2 存在感をもたせる場をつくる

学校や学級の中で疎外されていると感じている子どもにとって、自分の存在を認めてほしいという欲求は常に心の根底にあります。

したがって、学校行事で活躍できる場を与える、学級内で役割をもたせる、授業の中で出番を与えるなどすることにより、A男に「やった」「できた」というような成就感や充実感を味わわせることが重要となってきます。

3 保護者と信頼関係をつくる

生徒が問題行動を起こした時のみ、保護者に電話で注意を促したり、来校してもらい、生徒の行動や保護者の養育態度について注意したりすることがあります。しかし、そのことが保護者の不安感を増し、時には学校に対する不信感を助長するだけに終わってしまうこともよくあります。したがって、日頃から家庭訪問や電話などで、保護者の思いや悩みを聴く中で、保護者との信頼関係をつくっていき、子どもの指導において連携が図れるようにしておくことが大切です。

以上のようなことが対応の基本ですが、A男の心にどこまでも寄り添いながら、共感的に理解するように努めます。人間として許せない行為に対しては、毅然とした態度で臨むのはもちろんのことですが、あきらめずに、どこまでもかかわり続けようとする姿勢をもつことが大切です。

広島市教育センター指導主事 三原裕隆

教育実践基礎講座(9)

新しい学力観に立った評価

広島市教育センター指導主事 正坊地 武 生

○新しい学力観と評価

学力についての考え方が、知識・理解、技能などに偏重していた従来の考え方から、子どもが自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含む豊かで創造的な能力を重視する学力観に立つものへと変わってきました。それにともなって情意的な側面の関心・意欲・態度の評価が重視されるようになってきました。評価の考え方、評価の仕方は様々ですが、子ども一人一人の可能性を積極的に見い出し、それを伸ばすよう個人の優れている点や長所などを進んで評価していかななくてはなりません。

○評価方法の工夫

新しい学力観に立って各教科の特性を生かした指導を進めていくためには、評価の内容や方法について次のような視点で改善を図る必要があります。

・指導前における評価

授業を進めるに当たっては、指導内容について、子どもがどのような知識を身につけ、どの程度の学習意欲をもっているかを評価します。このことは、これから行う指導内容や指導方法などを、子どもの実態に合ったものにしていくための重要な参考資料となります。

・指導過程における評価

授業は、その時間のねらいに即して進められます。したがって、その過程での評価は、学習活動そのものの評価です。子ども一人一人の変容をとらえ、即座にその結果を分析して指導に生かしていくことで、子どもの学習意欲を高め主体的な学習を促進することに役立てることができます。また、子ども自身による評価（自己評価）を行わせることで、より主体的に学習を進めさせることができます。

・指導後における評価

この評価は、1単位時間、あるいは単元、学期、学年ごとの終了時に目標と照らし合わせながら、一人一人が目標をどの程度達成できているかを明らかにするためのものです。単に知識や理解したことのみを評価するのではなく、その結果を指導の反省の材料にし、次の指導計画の改善に役立てるなど子どもの学習効果を高めるための評価にしなければなりません。ここでも自己評価を行わせ、自分自身を振り返らせる手だてにすることもできます。

○自己評価

自己評価の力を育てることは課題意識をもたせたり、学習方法を身につけさせたりする上で大切です。自己評価は、次のような観点から行わせるとよいでしょう。

- 1 学習活動への参加状況の振り返り
- 2 向上、成長の状況の振り返り
- 3 学習に対する習慣、態度の振り返り
- 4 対人関係の在り方の振り返り
- 5 自分自身の全体的な在り方の振り返り

次の図は自己評価を行わせる手だての一例としての自己評価カードです。

指導と評価は表裏一体を成すものです。教師自らの学力観や評価観について再吟味し、主体的に学ぶ子どもを育てる評価の在り方を探っていきたいものです。

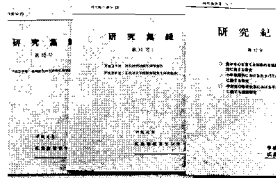
ふりかえりカード	
5年()組()番	名前()
1. 今日の学習のめあてを書きましょう。	
[]	
2. 学習してわかったことを書きましょう。	
3. もう一度学習したいところや、考えてみたいところを書きましょう。	
4. 楽しかったことや、またやってみたいと思うことを書きましょう。	
5. あてはまるところに○をつけましょう。	
先生の話を	(よく聞いた。 あまり聞かなかった。)
自分の考えを	(しっかり持った。 あまり持てなかった。)
友だちの意見を	(よく聞いた。 あまり聞かなかった。)
話合いを	(すすんでした。 あまりしなかった。)
6. 先生に一言あれば書きましょう。	

教育センターひろば

平成4年度 教育センターの主な事業

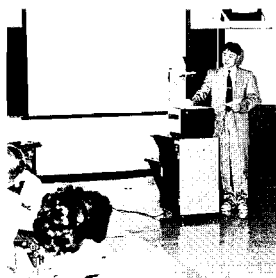
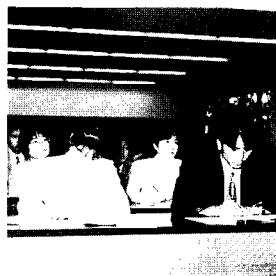
I 教育研究事業

- 研究紀要第12号
刊行 (4月)
- 中国・四国地区教育研究所連盟協議会 (5月, 10月)
研究発表大会
(10月) 開催



II 研修事業

- 計画研修
133講座
9,671名受講
(平成4年12月現在)
- 長期研修
教員特別研修生
1年 2名
6か月 12名
教育研究生
3か月 20名
研究集録第10号
研究集録第11号
刊行 (5月)
- 随時研修
随時研修 1,719名
施設利用 7,403名
視察 43名
(平成4年12月現在)



III 教育相談事業

- 教育相談 1,298件
- 障害をもつ子どもの教育相談 776件
(平成4年12月現在)



IV 教育関係資料整備事業

- 貸出
図書 764件
視聴覚資料 721件
(平成4年12月現在)
- 教育図書・資料目録第14集刊行
- 教育映画フィルム・ビデオ教材目録第3集刊行



V アジア諸国・地域の教科書に関する調査研究事業

- 14か国・地域265冊
収集



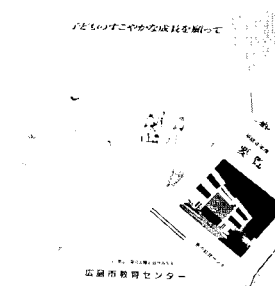
VI 新教育機器利用研究事業

- 研究協力校 3校
プロジェクト研究員 21名
- コンピュータ教育利用研究プロジェクト報告書刊行



VII 広報事業

- 要覧、所報、各種案内、センター案内、教育相談ポスター等発行



表紙絵 広島市立青崎小学校校長 澤井 隆三
題 字 広島市立広島商業高等学校教諭 進藤 正則

編 集 後 記

年度末を迎え、研修、学習指導、事業等のまとめにお忙しいことと存じます。今年度最後の所報をお届けいたします。